

総論

広島大学 山元 隆春

人と学問

私どもが大学の講義・

演習において、あるいは研究室を巣立った後でさえ大槻和夫先生から教えていただいたさまざまな場面を思い返してみると、先生のお仕事の広さ・深さの源の一つに、その類まれなる理解力があることを思わざるをえない。

どのような問題であろうと、先生は即座にその核心を見抜かれ、討議の方向を決定づけていかれた。演習の発表を担当する私どもよりも、つねに扱われた問題の置かれた状況・文脈を正確に捉えておられたのが大槻先生だったのである。

先生の論究のなまりようは、けつして一つの領域のことばで他の領域をも説明しようとするものではない。むしろ、多くの問題が包み込まれる状況の全体を捉えることの可能なことばを探りつつ、そのような状況において当該の問題が担う意味合いを常に明らかになさろうとされた。

絶えず、教育の現実から思考を進めてい

こうとされた大槻先生の学問は、それゆえ

にこそヴィヴィッドに私どもの心に働きかける。ご論文にしても、ご講演にしても、読む者・聞く者の心を捉えて離さないのはそういうところである。そのようなかたちでオーディエンスを揺さぶることができるのも、先生ご自身の内部に絶えず動き続ける問題意識があったためであると思う。

ある時期、公の求める国語教育の目標についての依頼原稿をおまとめになるにあたって、先生は国語教育そのものの目標について同時期に出版された諸々の文献よりも、まずその時期の『経済白書』を繙いたとおっしゃったことがある。もちろん『経済白書』だけで国語教育の目標論を書くことができるとおっしゃったのではない。そうではなくて、教育・国語教育を考えていくとき、本質的な論究を行うことはもちろんのことであるが、社会的な状況や常態に視野に入れておかなければ事の本質を見誤ってしまうということを、教えていた

いたのであると思う。より大きな context のなかに問題を置いて考えてみるものが、その問題の意味をより広く・深く考察することにつながるのだという先生の学問の思想を私はそこに見るのである。

大槻「国語教育学」——輪郭と真髓

本号においては、教育・国語教育に関する大槻先生の膨大なお仕事を、それぞれ、

- Ⅱ 「授業論」
- Ⅲ 「ドイツ国語教育論」
- Ⅳ 「文学教育論」
- Ⅴ 「説明的文章教育論」
- Ⅵ 「作文教育論」
- Ⅶ 「言語教育論」
- Ⅷ 「古典文学教育論」
- Ⅷ 「大学教育・教師教育論」
- Ⅸ 「平和教育論および活動」

X IX VIII VII VI V IV III II

の、九つの部門に分け、各部門の理論と実践に関して、第一線で活躍なさっておられる先生方に「解題」をお願いした。

「解題」を担当なさった先生方がそれぞれの領域で多くの研究・実践を積み重ねてこられており、その専門的見地から大槻先

生のお仕事を多角的に検討していただいた。先生方の御論考によって、改めて大槻先生のお仕事の広さ・深さを実感し、感服する次第である。

何よりも強く感じることは、大槻先生のお仕事が「国語教育学」に限定されていないということである。幅広い視野を保ちながら、「国語教育学」を他の領域との連続性の中で捉えていこうとされたのだと思う。先生のお仕事がこのような広さ・深さをそなえておられるのも、「国語教育学」が学際的な性格を持たざるを得ないことを先生ご自身がつとに認識され、その研究の方向性を追及なさりつづけた結果であったのではないかと考える。そればかりでなく、「国語教育学」に社会文化的な役割を担わせ、歴史のなかに定位し、さらに現代の状況と密接に関わるものとしての性格づけをなさろうとしたところに、大槻先生の学問の真髓があると私かに考えている。

*

私などは、大槻先生の幅広い関心領域のごく一部でしか先生のご指導をいただくことができなかった存在ではあるが、それでもほんとうに多くのことを学ばせていただいた。中等国語教育における教材構成・単

元構成のあり方を学び、学習者と対峙しながらも、学習者の関心に根ざした学習を開発するさまざまなヒントを与えていただいたこともある。講義・演習を通して、現在の社会状況・教育の状況を見据えた国語教育学研究のあり方を学ばせていただいたこともある。

先生のご指導は、単に問題点を指摘するだけでなく、どのようなことに着目して問題を深めていけばよいかということを含んだ、その人の研究を伸ばしていくための示唆を必ず含んだものであった。鋭い刃を感じさせながら、しかし温もりに溢れたものであった。乏しいアイデアが、先生とお話しするうちに豊かに膨らんでいく思いを抱いたのは、おそらく私だけのことではないだろう。

可能性とその継承

最近になって、

大槻先生が最近の教育学の研究動向を捉えながら、「自分のやってきたことはいったい何だったのだろうか。自分のやってきたことにどんな意味があったのだろうか、疑問に思う。」というような内容のことをつぶやかれたことがある。私はそれをお聞きしながら、先生のお仕事はけっして古くもなっ

ていなければ、意味を失ってもいない、そうではなくて、最近の教育学の研究内容がようやく、先生の切り拓いてこられた地点に及んだというだけのことなのでありませんか、と不遜にも思い、おそろおそろそのようなことを口にした記憶がある。この号に掲載された諸先生の「大槻和夫論」をお読みいただければ、私が大槻先生にお答えしたことがけっして私個人の感想にとどまらぬものであることは明らかであると考え。

先生の教えてくださったことは、教え子の私どもの心と身体に記憶されて残り、いくつかのことは確実に私どもの次の世代へと引き継がれていくのだと確信している。さまざまな場面で、先生の播かれた多様な種子が、一つとして同じもののない多くの状況のなかで開花していくであろうことを切に願ひ、また信じたい。

*

最後に、この「解題 大槻和夫先生」企画を組むにあたって、心の込もった御論考を執筆いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。